

元重拳
—— 特立独行の人 ——

高橋博巳



(図1) 『東槎余談』写真，右元重拳，左金仁謙。

1

明和甲申（一七六四）の朝鮮通信使に副使書記として使行した元重拳（一七一九〜九〇）字子才、号玄川（この使行時は仲拳とも）は、多くの友人たちに一目置かれながら、詩文の集成も伝わず、その作品を系統的にたどることが困難な人物のひとりである。しかし幸いにして、通信使と応接した日本の儒者や文人たちの書き残したもののなかに、玄川への、その作品を含む少なからぬ言及があり、これらを見てゆくと玄川は日本各地でいい出会いを重ねたことが明らかとなる。

おそらくこの体験をもとにして、帰国後は自然な成り行きとして日本紹介者としての役割を果たすことになったのであろう。しかもその影響は意外な広がりを見せ、李氏朝鮮内に止まらず、余波は東アジア全域を覆うほどだった。日本各地で行われた詩文の唱酬を通じて親交が深まり、それがソウルに伝えられ、やがて様々な偶然を経て中・朝兩國に跨る文芸共和国の成立を引き起こしたという仮説を小論がいささかなりとも検証する足がかりとなれば幸いである。とはいえ玄川本人にそこまでの自覚はなかったろうが、こうした重要なきっかけを作った人物の活動はそれだけで十分注目に値するだろう。¹⁾

そこでまず最初に、玄川が江戸で面会した宮瀬竜門（一七一九〜七一）によって描かれた肖像を見ておこう（『東槎余談』「写真」、図1

右、東北大学附属図書館蔵自筆本)。江戸の儒者宮瀬竜門の姓は劉、名は維翰、字は文翼といい、竜門は号である。その画筆は、当時四十六歳だった玄川の落ち着いた風貌を見事に捉えている。同書「巻首」にはまた、

玄川、玉立秀雅、少髯銳面、瀟灑敬す可し。

という記述があるように、「玉立」は貞潔、「秀雅」は秀でて優雅、「銳面」は面貌鋭く、「瀟灑」俗を離れて清らかな様子は、肖像のイメージともびったり合っている。しかし他方で、

之れを要するに、則ち秋月・竜淵は風流にして雅なり。玄川・退石は往往にして頭巾氣象を露す。宛然として道学先生の風有り。

と記されてもいるので、製述官の南玉(一七二二〜七〇)字時韞、号秋月と正使書記の成大中(一七三二〜一八〇九)字士執、号竜淵は見るからに「風流にして雅」であったのに、玄川と従事書記の金仁謙(一〇七〇〜七二、図1左、同上)字士安、号退石には「道学先生」の風があったというのである。「頭巾氣象」とは頭巾をかぶった儒者が醸し出す雰囲気、すなわち融通の利かない頑固者の意味で使われることが多い。竜門自身が、そのような雰囲気と反撥した徂徠学派寄りの儒者だったので、この評価にはそうしたバイアスもかかっているだろうが、厳格な朱子学者だった玄川の言動は周囲に堅苦しさを感じさせることもあったようだ。わずかな例外をのぞき、朱子学一辺倒だった朝鮮儒学と、仁斎・徂徠以後の日本の思想界とのギャップは大きく、相互の対話は容易ではなかったこと、後に見るとおりである。

2

通信使一行の最初の寄港地は対馬であるが、本格的な歓迎は筑前藍島で行われた。ところが一行は十二月二日に藍島に到着したものの、玄川の『乗槎録』六日の条には、「前人の日記」を見ると「文士と称する」人々が大勢やってきて「酬応」に追われているのに、このたびは「寂然として声無きは甚だ怪しむ可きなり」と訝しげに記されている。「今番は則ち只だ紀国瑞一人有るのみにして、亦た一たび来たり相見するのみ」と、対馬藩の対応もはかばかしくはなかったようだ。「紀国瑞」については、成大中の『槎上記』十一月二十一日の条に、「雨森東の弟子、能く三国語に通ず」と記されている。こうしてしばらく無聊を託っていたところ、ようやく八日になって、

紀国瑞、本州文人四を引き、来謁す。各おの詩数三章有り、次韻す。而して其の中の筑前の医、亀井魯なる者、季二十一、聡慧絶倫、筆翰飛ぶが如し。但だ其の秃頭を惜しむのみ。蓋し入海後、初見なり。其の余は皆な醇謹にして紙を伸べ筆を動かし、拳止頗る観る可し。(高麗大学校六堂文庫蔵写本)

ということになった。なかでも数え年二十一歳の亀井南冥(一七四三〜一八一四)名は魯、字道載(哉)に玄川は注目している。当時の儒医が僧形をしていたことへの違和感を除けば、「聡慧絶倫」といい、「拳止」立ち居振る舞いも「頗る観る可し」というのも、ほとんど絶賛に近く、この第一印象は日本に対する好感度を高めただろう。

このとき南冥は、藩儒井土魯庵の門下という名目で歓迎行事に参加し、「三記室に寄す」の一として玄川に次の詩を贈っている。

西韓文学総称賢

西韓の文学 総て賢と称す

令望偏從使節懸 令望 偏えに使節に従りて懸く

錦綺裁詩霜後樹 錦綺 詩を裁す 霜後の樹

江山多助雪刃船 江山 助け多し 雪刃の船

征帆莫惜淹三日 征帆 惜しむ莫かれ 三日淹まるを

帰棹応期隔一年 帰棹 応に期すべし 一年隔つるを

只恨長風無路駕 只だ長風 路の駕する無きを恨み

斯心欲借素書伝 斯の心 素書を借りて伝えんと欲す

〔『泐泐余響』上、『亀井南冥昭陽全集』

1、葦書房、一九八七年〕

「西韓文学」は韓国の儒者、学者、具体的には玄川たち使節を指す。

「令望」は優れた人望。「錦綺」は、にしきと綾織り、美しい絹織物。

「霜後」の紅葉をいう。「征帆」は遠来の通信使船。「帰棹」は帰り船。

「長風」は遠くまで吹く風。「素書」は手紙。これは初対面の挨拶ながら、一行について行けない以上、手紙で「心」を伝えたいという熱意が相手に通じたのであろう。玄川の和詩は、以下の通り。

殊方何幸会群賢 殊方 何の幸いか 群賢と会す

一見欣然榻解懸 一見 欣然として 解懸を榻す

積雪正懷天北極 積雪 正に懷しむ 天北の極

微陽方発日南船 微陽 方に発す 日南の船

寒歸漢使浮槎路 寒に歸る 漢使 浮槎の路

行憶徐生采菓年 行くゆく憶う 徐生 采菓の年

華筆縦横声气静 華筆縦横 声气静かなり

清談佳句替相伝 清談佳句 替わりて相伝えん

「榻」は文字を写す。「微陽」は薄日、夕日。「日南」は漢代に現在の

ベトナム北部に置かれた郡名であるが、ここでは日本の意。「浮槎」

は筏。通信使の旅を「漢使」のそれに喩えた。「徐生」は秦始皇帝の命で不老不死の薬を探す旅に出たという徐福のこと。「華筆」は南冥

らの筆さばきに対する敬意を示す。「声气」は語気。こうして藍島で「群賢」に迎えられた玄川は航海の疲れを癒し、思いがけない南冥ら

との出会いによって、早くも「清談佳句」を朝鮮に伝える意思を抱くに至ったことが注目される。

一日おいて「十日会集」では、そうした親しみゆえであろうか、玄川が敢えて忠告を試みている。

字を作れば、必ず楷正なるべし。屢しば篇章を見るに、常に翺々へんべん奔放の意多くして、沈着端詳の意少なし。此れ亦た好学の、未だ如何なるかを知らざるもの多し。

「楷正」は端正な楷書。「篇章」は詩文。「翺々」は筆勢が軽妙なさま。「奔放」と熟されることによって、氣勢横溢というよりも破天荒な書きぶりに玄川が眉を擡めたことが知られる。「端詳」は形が整って法度に合うこと。この率直な助言に対し、南冥が応える。

僕、生来、客気多し。修して消さんと欲すること万々たるも、未だ之れ能わず。故に文字動もすれば放宕の語を致す。十年の後、其の円熟を修め、客気消竭すれば、則ち文語も亦た随いて変わらんのみ。

「殊方」は異郷の地。「解懸」は苦しみからの解放。『莊子』養生主篇に「帝の懸解」とあるが、ここは航海の苦勞を述べたものであろう。

「放宕」は、いいかげんで締めまらないこと。南冥自身も「客気」すなわち大向こうをねらった空元気を自覚してはいたのである。玄川の

質問が続く。

「客氣消竭」の四字、既に自ら病源を知る。亦た自ら薬を知るや否や。薬は何方を用うるや。

処方を問われた南冥は、「修心湯、是れのみ」と答えている。玄川は「修身」に満足して「二字尽くせり」と言いながら、重ねて「然れども修心は亦た当に何方を用うべき」と尋ね、これに対する「人情世態、石を踏んで、堅を知る。是れ以て諭う可きと為す」という南冥の返事に、玄川がいよいよ核心に触れている。

聖門の千言万語、皆な敬字上より演出す。以て字を作る時、尤も体認し易し。故に特に高明の与に之れを発するのみ。

「聖門の千言万語」は聖人の門、すなわち儒学の言葉。「敬」は居敬窮理というかたちで殊に朱子学において重視された。「体認」は体験を通じて認識すること。字を書くことでもその修練ができるということである。「高明」は相手に対する敬称。すると南冥も次のように持論を展開している。

僕も亦た嘗て言有り。之れを事に嘗み、之れを実に履んで、其の難きを知れば勉強を以てす。之れを時に察し、之れを勢に会す。其の機を知るに進取を以てす。之れを名に除き、之れを利に遠ざけ、其の己に克つに理を修むることを以てす。此れ亦た吾が薬籠中の一秘方なり。君が為に籠を発くを惜しまず。

二十歳を過ぎたばかりの駆け出しの儒生の発言としては立派なもので

ある。玄川はこれを見て、「回誦数回、筆を停むること、食頃にして、忽ち曰く、吾が邦の大賢、白首に至るも小童童子を自称する者有り。此の道理、甚だ好し」と述べたと、南冥は伝えている。このように「事」「実」に基づき、「時」「勢」に照らしながら、「名」「利」を遠ざけ「克己」と「修理」を実践するという南冥の姿勢は、玄川の心を動かしたようだ。「食頃」しばらくのあいだ、玄川が口ずさんでいたというのも頷ける。しかし「敬」の問題は、これによって一時持ち越された。

ここで玄川が南冥の作に次韻した作三首を順次、釈すれば次のようになる。

海外奇才識面時

鳳毛鱗角自無疑

婦舟不共斯人出

他日知君更是誰

海外の奇才 識面の時

鳳毛鱗角 自ら疑い無し

婦舟 共にせずして 斯の人出で

他日 君を知れば 更に是れ誰とかなさん

「識面」は面識。「鳳毛」は容姿や文才が優れていること。「鱗角」はめったにないもの。玄川はこうして南冥を「奇才」と捉えたのである。

相逢之処即離亭

山自依々水欲停

不似文章能事在

肯將朽木入丹青

相逢うの処 即ち離亭

山は自ら依々 水は停めんと欲す

必らずしも文章は能事に在らず

肯えて朽木をもって丹青に入れん

「離亭」は送別の酒宴を行う街道沿いの亭。逢ったばかりで別れる慌ただしさをいう。「依々」は離れがたい様子。「山」や「水」すなわち

風景さえも、名残惜しそうに引き留めようとしているかのようだ。「能事」はすぐれた技。「朽木」は『論語』公冶長篇によって、腐って彫刻もできない木。

翩翩奇句筆淋漓 翩翩たる奇句筆淋漓

憶爾高軒初賦時 憶う爾高軒に初めて賦す時

多少慇懃言外意 多少の慇懃言外の意

詩文余事老成期 詩文は余事老成を期せ

「翩翩奇句」は軽快で文才があること。「淋漓」は筆勢がさかんなさま。「慇懃」は丁寧に気を配ること。歓迎の席で初めて南冥を見かけたときの印象である。「言外」は言葉で直接表現した以外の意味。「余事」は余力でする仕事。ここには「詩文」以外に、「老成」すなわち徳をそなえて円熟した人物になるようにという南冥に対する期待が示されている。

さらにまた南冥の詩に和したものに、次の連作がある。

篇章無補日淋漓 篇章補う無く日に淋漓

至味元従不晤時 至味元より従う晤わざる時

人世生才知有用 人世才を生ずるは用有るを知る

青春莫負読書期 青春負く莫かれ読書の期

南冥の詩文は補訂を必要としないほど優れていたというのである。それはこうして出会う前から、そのとおりであったろう。「至味」は最上の味わい。この世に生をうけて才能に恵まれたなら、その才能を発揮すべく「読書」つまり勉学に努めなければならない。

正脈斯文溯考亭 正脈の斯文は考亭に溯り

淵源溥博布無停 淵源溥博布きて停まる無し

詩書六芸猶難暇 詩書六芸猶お暇なり難し

余外何須滿架青 余外何ぞ須いん滿架の青

「正脈」は正系。「考亭」は朱熹(一一三〇〜一二〇〇)。「溥博」は広大で行き渡る意。『中庸』第十八章に「溥博淵泉にして、而して時にこれを出だす。溥博は天の如く、淵泉は淵の如し」(金谷治訳注『大学・中庸』岩波文庫)とある。「詩書六芸」は論・孟・大学・中庸の四書に、詩・書・易・春秋・礼(周礼)・楽(礼記)の六経を指す。「余外」はそのほかに。「滿架の青」は書棚に溢れる書物。

生出奇才海外郷 奇才を生出す海外の郷

男児事業与年長 男児の事業は年とともに長し

寒松老竹他時翠 寒松老竹他時の翠

百草千花寂寞霜 百草千花寂寞の霜

「生出」は出生。「寂寞」は寂しく静か。「寒松」は冬の松。「他時」は他日。

ところで次のやりとりもまた玄川の率直な性格をよく伝えている。南冥の訪問がしばらく途絶えていたので、その訪問を心待ちにしていたであろう玄川は、「多日、跽音無し。何事の故有るや」と尋ねた。南冥の返事は、「唯だ官命下らざるのみ」という簡単なものだった。すると玄川は唐突にこう切り出している。

身体髮膚、之れを父母に受く。君、何ぞ鬚髮を剃除するや。

すで見たとように、儒者の「禿頭」に玄川は初対面以来、違和感をもっていたが、やっとここでそれを話題にしたのである。訝る玄川に、南冥が答える。

昔、孔子は宋に於いては宋たり、越に於いては越たり。

この答えには南冥の鼻っ柱の強さとともに、多少の劣等感も含まれていただろう。それにしてもこういうときに、孔子を引き合いに出すのは僭越の誇りを免れ難い。玄川もさすがに「大聖人の事、妄りに自証す可からず」とたしなめつつ、南冥がかねて荻生徂徠（一六六六〜一七二八）字は茂卿と永富独嘯庵（一七三二〜一六六）を高く評価していたことに関連して、次のように質問を続けている。

君の業を独嘯に受くる者は、文章か、学業か。抑も医業か。

南冥はそれに対して、「唯だ医業学術のみ。文藻は之れを肥の大潮翁に学ぶ」と、大潮元皓（一六七六〜一七六八）の名前を挙げ、「文場の馬伏波」という評判を伝えている。「馬伏波」とは後漢の伏波將軍だった馬援のこと。いずれにしても大潮は西南の徂徠学流行に大きな役割を果たした。そのために、通信使一行との間に意識のずれが生じたのである。

玄川はまたこうも言っている。

君を得て甚だ喜ぶ。君と別れて甚だ恨む。若し手を江戸に携えれば、以て千古を揚扞するに足る。羈愁を擺落するに、君能く之れを弁す可けんや否や。何の名目に托すれば則ち往く可けんや。

どういう「名目」なら江戸まで同行できるかという玄川の問いかけに、「此の事、終に得可からず。余も亦た悵然たらざるを得ず」と南冥は答えている。「千古」は太古以来の事柄。「揚扞」は発揚すること。「擺落」は払い捨てること。そうすれば「羈愁」、旅の愁いも忘れることができるというのである。

また「集詩」のなかに、次のような玄川の作も収められている。

生来無是又無非

生来 是無く 又た非も無し

菓草春山潤細霏

菓草春山 細霏に潤う

千載川辺孤月出

千載川辺 孤月出で

浪華江上独鴻飛

浪華江上 独鴻飛ぶ

風雲正喜携盈袖

風雲 正に喜ぶ 携えて袖に盈つるを

饑渴因忘坐掩扉

饑渴 忘れるに因って 坐して扉を掩う

權笑慙慙藍島側

權笑 慙慙 藍島の側

愛君難得載之帰

君を愛して得難し 之れを載せて帰ることを

「生来」は生まれてこのかた。「細霏」は小雨。「千載川」は筑後川の古名。「独鴻」は一羽の白鳥。「權笑」は、よろこび笑う。

滄海窮陰日

滄海 窮陰の日

離人独坐朝

離人 独坐の朝

愁深双鬢爰

愁深く 双鬢爰す

夢入極波遥

夢は極波に入りて遥かなり

山出千峯雪

山は出づ 千峯の雪

天低一道潮

天は低し 一道の潮

詩文無物我

詩文 物我無し

賓館夜相要 賓館夜相要す

「滄海」は大海原。「窮陰」は季冬、冬の末。「離人」は旅人。「双鬢」は左右の髪。「極波」は高波。「物我」は外物と自己。「相要」は相い迎える。

奇才不易得 奇才は得易からず

詞律又芳年 詞律 又た芳年

竹篋牙籤散 竹篋に牙籤散じ

煤帷木燭懸 煤帷に木燭懸かる

有時思跌宕 時有りてか 跌宕を思い

高詠倚泓潤 高詠 泓潤に倚る

最愛眉間氣 最も愛す 眉間の氣

相留竟夜筵 相い留む 竟夜の筵

「芳年」は青春の年。「竹篋」は書物などを入れる竹の箱。「牙籤」は蔵書の分類のさい、見出し用に付ける象牙の札。「煤帷」は煤けたとばり。「木燭」は粗末な照明であろう。「跌宕」は無頓着に振る舞うこと。「泓潤」は硯。「眉間」は額の中央あたり。「竟夜の筵」は夜すがらの宴席。

3

赤間が関で一行を迎えたのは、滝鶴台（一七〇九〜七三）名は長愷、通称弥八である。迎えられる通信使のほうも、南冥の助言によって鶴台との面会を心待ちにしていたであろう。鶴台のことは既に南冥によって、「長門に滝弥八なる者有り。博学豪才、甚だ詞藻を善くす」（『決泮余響』上）と知らされていたからである。挨拶もそこそこに、通信

使一行に呈された鶴台の詩のうち、玄川には次の詩が贈られている。

樓船破浪駕長風 樓船 浪を破り長風に駕す

鰐浦藍洲指顧中 鰐浦 藍洲 指顧の中

更向東方迎日出 更に東方に向かって日の出を迎うれば

扶桑若木不難窮 扶桑 若木 窮め難からざらん

（『長門癸甲問槎』一、明和三年、一七六六、刊本）

「鰐浦」は対馬市上対馬町鰐浦。「藍洲」は藍島。「指顧の中」は呼べば答えるほどの近い距離の意ながら、じっさいに通信使の船旅は難渋したこと、成大中の『日本録』十月一日の「夜大風」以下、九日「大風雨終日」、十三日「夜大風雨雹」、十四日「大風寒」、十七日「夜大風濤」というふうには、ようやく「鰐浦」を通過したのが十九日、それから十二月三日に藍島にたどり着くまで「大風」や大波に見舞われながらの航海だったことを知っていれば、また別の表現になったかもしれない。「扶桑・若木」は崑崙山の頂上にあるといわれる二本の神木。太陽は扶桑から出て、若木に沈むという。「不難窮」はこの神木を窮めることも難しくないという意。

これに対して、玄川は「鶴台に和す」として、

曾因龜子把高風 曾て龜子に因りて 高風を把す

詞翰逢迎此海中 詞翰 逢迎す 此の海の中

日短話長賓館裏 日短かく 話は長し 賓館の裏

郵筒相對意難窮 郵筒 相對して 意窮め難し

と詠じている。「龜子」は亀井南冥。「高風」はすぐれた風格。「詞翰」は詩文。「郵筒」は手紙。続く筆談において、玄川がいう。

芝宇に接し、道哉が言を思う。以て道哉が賢、能く人を知るの明を知る可し。蘭玉、傍らに在り。満座の諸賢、俱に是れ東脩と云う。甚だ盛んなるかな。門徒幾人ぞ。成就の者、亦た幾人ぞ。此の地、古より文士の郷と称す。即ち今、蔚然として声望有る者、歴数することを得可きや否や。

「芝宇」は優れた顔立ち。「道哉」は南冥の通称。「蘭玉」は他人の子弟を褒める言い方。「東脩」は入門時などに持参する干し肉から、こは弟子の意。このとき鶴台は草場大麓以下、大勢の門下を従えていた。これに対して鶴台は、「奨誉の甚だしき、当たる所に非ざるなり」と謙遜している。「蔚然」は盛んな様子。さらに玄川が、

此の処も亦た宜しく性理の学有るべし。果たして程朱を宗主するや否や。

と、朱子学を「宗主」中心として学んでいるかと尋ねると、鶴台は、

此の方、亦た性理の学有り。膝惺窩・林羅山唱首す。爾来、其の統を伝うる者少なからず。近歳、東都に徂徠先生なる者有り。大いに復古の学を唱え、海内を風靡す。著す所、『弁道』『弁明』『論語徴』等有り。其の詳は、一席話の能く尽くす所に非ざるなり。

と答えている。藤原惺窩(一五六一〜一六一九)や林羅山(一五八三〜一六五七)の名前を挙げつつ、肝心の徂徠学に論点を移し、しかも詳細は簡単に伝えたいというのである。

すると玄川は「此れ皆な程朱を宗主とするや否や」と畳みかけて尋

ねている。鶴台はそれに対し、

程朱を排して、禪儒と為して、取らず。其の学は古経を宗として、註解に拠らず、古言を以て古経を証す。信拠す可きに似たり。

と答えたところ、玄川は、

註解を捨てて経を読むは、猶お無相の譬のごとし。程朱の学は、日の天に中するが如し。篤く程朱を信せんと欲せざる者は、皆な異端なり。高明の意見、未だ如何なるかを知らず。

と云って「程朱」以外は「異端」として否定した。「無相の譬」は助ける者がいない盲人。『礼記』仲尼燕居篇の「国を治めて、礼無きは、譬うれば猶お瞽の相無きがごとし」に拠る。そこで鶴台は、迂回作戦に出た。

筑前に貝原先生なる者有り。程朱を尊信すること、孔孟を信ずるが如し。而るに晩年『大疑録』を著わし、程朱の言の、経旨に背馳する者を標挙す。僕も亦た疑い有るを免れざるのみ。

鶴台はこうして篤実な朱子学者の貝原益軒(一六三〇〜一七一四)の『大疑録』(明和四年、一七六七、刊)を引き合いに出して応戦につとめたものの、筋金入りの朱子学者に対しては火に油をそそぐようなものであった。

程朱の訓、豈に疑う可き者有らんや。大凡、読書の法、最も精詳し難し。既に未だ精思力践すること能わずして、遽かに疑難を致

せば、則ち正に猶お病者の真元に健ならず、客邪の闖入するがごとし。明儒の陸を祖とする者、正に此の習いに坐在す。今、貴邦を見るに、人材輩出し、大いに転移の機有り。而も源頭の不正、実に漫漫の憂い有り。高明の如き、徳遂く学正しき有り。須く大源を洞見し、後学を引進すべし。区々の意、自ら敢えて置きて論ぜずんばあらず。未だ知らず、高明の以て如何と為すかを。

こう言われて鶴台は「謹しみて明論を領す」とだけ答えている。「一席話」では片付かない話題だったからである。「精詳」は詳細で行き届いていること。しっかり理解する前に迷いがくると、健康を回復する前にまた別の病気が外部から侵入するようなものだという譬えは明快である。「明儒の陸」はもちろん陸象山（一一三九〜九二）。しかし、さすがの玄川もこのときはこれで戈を収めて、話題を変えている。

深く盛意を謝す。曾て聞く、貴邦の人、大抵誇張多しと。今、高明を見るに、篤厚、睨面なる者有り。諸少年、濟濟として謹愨の風有り。中心、之れを悦ぶ。忘る可からざるなり。幸いに世道の為に益すます努力せよ。

「睨面」は目が清らかでつややかな顔つき。「謹愨」は謹愿、慎み深く誠実なさま。これまで玄川は日本人は「誇張」が多いと信じていたが、鶴台の「篤厚」「睨面」によってその考えを改めたというのである。「篤厚」は親切で誠実なこと。

ここで贈答詩を見ておこう。

呈玄川（用前韻） 玄川に呈す（前韻を用う）

逢迎倒屣接仙風 逢迎 屣を倒にして仙風に接す
鶴駕暫留蕭寺中 鶴駕 暫く留む 蕭寺の中
明日翻飛霄漢外 明日 翻飛す 霄漢の外
清塵濁水恨難窮 清塵濁水 恨むらくは窮め難し

「倒屣」は靴を逆さまに履くほど、慌てる様子。「仙風」は優れた風采。「鶴駕」は周の靈王の太子、王子喬のことで、『三才図会』には笏を持って鶴に乗って登仙する姿が描かれている。玄川もそのような雰囲気を漂わせていたのだろうか。「蕭寺」は寺。「翻飛」はひらひらと舞い上がる。「霄漢」は大空。

和鶴台

鶴台に和す

楼船類似馭冷風 楼船 頗る冷風に馭するに似たり
飛出山光淡靄中 飛び出す山光 淡靄の中
眼見群仙揮彩筆 眼見す 群仙の彩筆を揮うを
玉烟珠露興難窮 玉烟珠露 興窮め難し

「冷風」は寒風。「山光」は山の景色。「淡靄」は薄もや。「眼見」は見る。「群仙」は神仙たち。薄もやのなかに美しく浮かび上がる山の景色はあたかも神仙が絵筆を振ったかのようなのだというのは、鶴台が王子喬のことを話題にしたからであろうか。「玉烟」は美しい霞。「珠露」は白露。

そして筆談が続くうち、玄川が「鶴台の華庚、昨日未だ旁聴に及ばず。幸いに更に之れを示せ」と、「華庚」年齢を尋ねると、鶴台は「虚度、五十有五」と答えた。「虚度」は無為に過ごすこと。それを受けて秋月が、

鶴台の風儀を観るに、詩詞罕に出でて、風流爛映、僕輩今日始めて海中の文風を觀る。僕輩も亦た光陰を虚度するに幾し。

と、玄川も、

聡明衰えず、筋力も亦た如何。僕今年四十五。尊より少きこと十歳。已に肉黄ばみ、皮皺よるを覚え、遺忘日に甚だし。今、尊の徳宇豊盈を見て、歎羨に勝えず。

と述べている。「徳宇」は器量。「歎羨」はたいそう羨むこと。それに對して鶴台がさらに、

蒲柳の質、独り齒髮の衰うるのみならず、眼耳も亦た大いに昔日に殊なり。公纔かに強仕に過ぐ。是を以て凶南超海の力有り。徒らに欽慕を増すのみ。

と応じている。「蒲柳」は秋に早く散る柳から虚弱の身をたとえる。

「強仕」は四十歳。「凶南」は鵬が南冥に行くことを企てることから『莊子』逍遙遊篇)、通信使行を諭えたもの。すると玄川はこう答えている。

僕、幼より多病にして先ず老ゆ。前年已に事を謝し、田に帰る。今の行は脅迫せらるるに、至親を以てし、天陞の命を承く。疾を力めて来るのみ。海に入りて後、最も傷損せらる。真に古人の所謂る其の帰るに及びては、尽く華髮ならんのみ。奈何、奈何。

「帰田」は帰農する。陶潜(三六五〜四二七)の「帰園田居」が意識

されていてよう。「至親」は近い肉親。「天陞」は御所の階段。「華髮」は白髮。むろん旅の苦勞がもたらすであろう結果である。鶴台はこれを受けて言う。

承る、公已に遂初を賦し、此の行、朝命に逼られ、再び起つと。賢勞知る可し。況んや万里海外風濤艱險傷心の極、言う可からざる者有らん。然りと雖も、素有に非ずんば雄飛の志、孰くにか能く斯に従事せん。壯なるかな。

「遂初」は初志を遂げる。致仕隱逸のこと。「賢勞」は人より多く苦勞すること。しかし玄川にもともとその志がなければ、通信使に従って来日することはなかったのではという問いかけに、玄川が答える。

去夜、唐詩を次いで懷を志す。曰えること有り、「吾が行、是れ桑蓬に志すにあらず。小芸聊か將た五百に同じ」と。此の一句、以て僕の志を見るに足るなり。

「桑蓬」の志とは、男子が生まれると桑の木で作った弓で蓬の矢を天地四方に射て、四方に雄飛することを祈ること。玄川の通信使行はそのような大それたものではなく、「小芸」をもって通信使に随う五百人の人々と同じだという意。これを聞いて、鶴台は「静退の徳、感服に堪えず」と応じている。「静退」は物静かで控えめなこと。

ところでこのときの玄川の質問には、次のような事項まで含まれていた。

大抵、貴邦の人、食甚だ淡にして切、齒切を喜ばず。果たして然りや否や。

この観察は、和食の「淡にして切」あっさりさっぱりして一口で食べられるように調理済みで、固い食べ物を歯で噛み切る（「歯切」）ことは嫌いな日本人の食事の傾向を見事に捉えている。鶴台もそれを、

果たして然り。常に魚菜を喫す。肉を喫する者、ただ少なし。

と肯定している。こうして日本情報は少しずつ蓄積された。以上が十二月二十九日の記録である。

ついで「晦日」の記録は呈詩から始まる。玄川には、次の詩が贈られた。

赤間関西紫海開	赤間が関の西紫海開け
海門波穩錦帆来	海門 波穩やかにして 錦帆来る
祥雲映日迎竜節	祥雲 日に映じて 竜節を迎え
明月含珠满蚌胎	明月 珠を含んで 蚌胎 <small>ほうたい</small> に満つ
賓館和歌皆大雅	賓館の和歌 皆な大雅
王朝承寵共英才	王朝に寵を承く 共に英才
莫論東道久留滞	論ずる莫かれ 東道 久しく留滞するを
刮目郷園衣繡回	目を刮 <small>ひら</small> かん 郷園 繡を衣て回るに

「紫海」は筑紫の海。「錦帆」は錦の帆で、通信使船を指す。「祥雲」はめでたい雲。「竜節」は使者の持つ割符。「蚌胎」は真珠をはらんでいるドブガイ。真珠は月と満ち欠けを同じくすると言われる。「大雅」は高尚で典雅。「東道」は東への道。「刮目」は期待して見る。末句は故郷に錦を飾る類をいう。

和鶴台 鶴台に和す

清朝雨歇篆烟開	清朝 雨歇んで 篆烟開く
脩竹叢辺見客来	脩竹叢辺 客の来るを見る
三嶋瑞雲鸞有羽	三嶋の瑞雲 鸞に羽有り
千年琪樹鶴成胎	千年の琪樹 鶴は胎を成す
詞林解識宗盟長	詞林解識す 宗盟の長きを
講帳応多入室才	講帳応に多かるべし 入室の才
談笑淋漓聊永夕	談笑淋漓 聊か永夕
不妨篝火夜深回	妨げず 篝火 夜深けて回るを

「清朝」は早朝。「篆烟」は揺れ上がる煙。「脩竹」は長い竹。「瑞雲」はめでたい雲。「琪樹」は仙郷の木。「永夕」は長夜。「篝火」はかがり火。

筆談においては、次のような苦言も呈している。

衆中の迎望、宛も宿昔の交の如し。神宮は是れ境に入る後、第一の勝概にして、之れを叢祠に帰す。甚だ惜しむ可きなり。俗史の人を悩殺するの示、説き得て快活。此の如き形勝、遠客をして登覽せしむるを欲せざるは、極めて意味無し。大抵、此の行の拘束、吾が輩に及ぶに至る、人をして鬱鬱として楽しまざらしむるは、甚だ歎ず可きなり。

「叢祠」は茂みのなかの社。これは玄川が亀山八幡宮の見物を希望したのに対して、許可されなかったことへの抗議である。鶴台はこれに對し、「凡そ法令の束する所、孰れか鬱悶に勝えざらん。而れども敢えて自ら恣にせず、是れ君子の君子為る所以なり」と必ずしも説得的ではない返事をしている。

帰途、再び面会したときの筆談で、注目されるのは次の条である。秋月が江戸その他の地で会った印象的な人々の名前を挙げたあとに、玄川が付け加えてこう言っている。

其の儀範峻偉、風流洋溢に至りては、則ち当に足下を以て冠冕と為すべし。此の言、面諛に非ざるなり。

〔『長門癸甲問槎』二〕

「儀範」は従うべき模範。「峻偉」高く立派な。「洋溢」は満ちあふれ広く広がること。「儀範・風流」の両面において、鶴台こそが「冠冕」第一人者だということである。「面諛」は当人を前にして媚びること、そういう追従ではないと断っている。

また玄川は江戸での体験を次のように伝えている。

江戸に在る時、井四明が書を見て、略ぼ鶴台の消息を聞けり。烟雲数千里、更に覚ゆ、依然たる玉澈、珍重にして、嵩山諸人俱に平安なりや。何ぞ携えて与に同に來たらざると。

「玉澈」の「玉」は美称、「澈」は水が澄んで透き通るさま。鶴台の人柄を譬えたものか。しかしこれに対する鶴台の反応は、意外にも「井四明、僕未だ其の人を審かにせず」というものだった。井上四明（一七三〇〜一八一九）は岡山藩儒として、牛窓で通信使に応接した。玄川はなお語を継いでいう。

四明、名は潜、備前州の文学なり。本と江戸に家す。備前に遊官す。去る時、酬唱最も多し。行きて江戸に到る後、書有り。鶴台の声聞を言うこと有り。備前の文学、四明が外、又た近藤篤、号

西崖なる者有り。足下俱に面雅無きか。僕輩書有り。鶴台に托し、以て井君に伝えんと欲す。幸いに便を覓めて伝致せば如何。

「声聞」は評判。これに対して、鶴台は四明・近藤西崖（涯）（一七二三〜一八〇七）ともに面識はないが、たしかに届けることを約束している。

ちなみに玄川はその『乗槎録』卷二のなかに、

四明は、翩々たる才気、亀井魯と一般にして、才は則ち及ばず。質は則ち稍や勝る。

という人物評を記している。

また山県周南（一六八七〜一七五二）に話題が及んだとき、側から大中が『徂徠集』中にその名が見えることを指摘したのを受けて、鶴台は『周南文集』『問槎畸賞』の二書を挙げたところ、玄川がさらに次のような質問をしている。

往還四五百里、接する所の文人韻士千余人。大抵聡明秀俊、詞藻蔚然として林立す。僕輩相語る毎に、以為えらく、日東の文運日に闢く。古人称する所、天氣北よりして南する者、斯に驗有り。但だ恨む、目今波奔して水趣する者、大抵是れ明儒王李の余弊にして、唱えて之れを起す者、物徂徠実に其の咎を執る。前日の足下の語、先に徂徠に及ぶ者有り。嵩山が書にも亦た提説する者有り。未だ知らず、足下と嵩山と、常に徂徠子を以て醇儒正学と為すかを。座間、忿撓と雖も、敢えて之れを一問す。

〔『長門癸甲問槎』二〕

「日東の文運」は日々、開けて隆盛しているようだが、おおむね「明儒王李」の古文辞派の影響下にあつて、その指導者が徂徠である。

「嵩山」は、『長門癸甲問槎』巻頭の「姓名」に記載のある秦（波田）嵩山。鶴台とは師弟関係にあり、徂徠の弟子と孫弟子に当たる。「忿撓」は人々が興奮して入り乱れている様子。その雑踏状態でも何はともあれ、徂徠はほんとうに「醇儒正学」と言えるのかを問い質さずにはいらなかった。鶴台の答えは、

此の方の学者、徂徠の教を遵奉せざる者鮮なし。僕と雖も、亦た然り。正不正の説に至りては、固より草草に尽くす可きに非ず。徂徠の著す所の書を読み、以て其の説を究めずんば、則ち安んぞ其の道の在る所を知らんや。会见渠央、諸君と其の説を論究するを得ず。深く以て憾みと為すのみ。

という歯切れの悪いものだった。玄川が続ける。

頃ごろ、江戸に在りて、『徂徠集』を以て来たり、之れを示す者有り。一番、披閱す。豪傑の才を以て、擗闘の弁を聘して、引用する所の者、皆な王李。徐ろに之れを論ずるに、其の病を受くるは、則ち又た甚だしき者有り。若し此の人をして首を操存実践の地に屈せしめば、則ち独り自我の幸いのみならず、其の後学を嘉恵する所以の者、豈に文章の末に至るのみならんや。朱子の道は、日の天に中するが如し。是れ孔子の後の一人なり。是れに反する者は、皆な魍魎の遠影なり。想うに、達識、鶴台の如き者は、只だ徂徠の明処を学ばんと欲す。其の暗処は、則ち蓋し已に痛く之れを棄てて、余り有らざらん。但だ恐る、後生新学、將に以為わん、鶴台は老成の者、猶お之れを遵奉すること、此くの如し。吾

が輩の依歸する所、独り是に在らずやと。其の世道の害を為すや、勝つて言う可からざる者有らん。幸いに望む、深く門に在れば、揮する義を引き、胥及溺るの弊に陥ること無かれ。（同上）

「擗闘」は開閉。『鬼谷子』に「擗闘は天地の道なり。擗闘は以て陰陽を變動す。四時開閉、以て万物を化す」と見える。「操存」は、『孟子』告子上篇に孔子の言として「操れば則ち存し、捨つれば則ち亡う」とあるように、本然の良心を正しく操り存在させること。「魍魎」は、すだま。「深く門に在れば……」は韓愈（七六八〜八二四）の「浮屠文暢師を送る序」に、「揚子雲称す、門牆に在りては、則ち之れを揮い、夷狄に在りては、則ち之れを進む」と見える。「揚子雲」は揚雄（前53—後18）。「胥及溺」は『毛詩』十八章「柔柔」に見え、『孟子』離婁上篇にも引かれているが、政治を問題にして今日の君臣の振る舞いを、互いに手を取り合つて水中に溺れるようなものだという意。

これに対する鶴台の答えは、以下のとおり。

徂徠の学は古言を以て古経を解す。明らかなること、火を觀るが如し。朱子、明德の解の如き、詩・左伝と合わず。仁を心徳と為し、專言・偏言の目有り。其の説は管仲に至りて寤す。古は詩書礼楽、之れを四教四術と謂い、士君子の学ぶ所は是れのみ。豈に本然・氣質・存養・省察・主一無適等、種種の目有らんや。聖人の道は、天を敬するを本と為す。徂徠の教も亦た然り。天を敬し、礼を守るの外、豈に別に操存実践の法有らんや。諸、此くの如き類、僕を更うるとも、何ぞ尽きん。是れ僕の程朱に疑い有る所以なり。

こうまで言われても、さすがに玄川は引き下がらない。

徂徠の明処は、足下も亦た与に明らかなり。其の暗処は則ち足下も亦た宜しく取捨有るべし。但だ此れ隻紙片言にして決す可からず。幸いに静居幽独の時に、却て古今の儒籍を取り、心中の物子を掃去し、只だ従頭順理に、擘き將って下し、文従い、意順なるを要す。後、更に物子の説を取りて、之れを觀れば、則ち足下の公平を以て、豈に痛く破綻の処を看得する所無からんや。且つ名教中、自ら樂地有り。何ぞ必ずしも礦辺の零砂を拾得して、以て百練の精金に較べん。区区の誠は、異邦人の一論と以い、即ち置かんことを欲せざるのみ。足下、幸いに之れを諒とせよ。後学新進、正に赤子の初めて言語を学ぶが如し。長者尤も当に十分慎重して、之れを教え、之れに習わしむべし。足下、学半の工、尤も軽んず可からざるなり。

まず徂徠学の「明処」と「暗処」を區別し、「取捨」しなければならぬ。そして心しずかに一旦、「心中の物子」を消し去って、白紙の状態でテキストに向かい、その後徂徠の言うところと比べてみれば、鶴台の「公平」な態度からして必ずや「破綻」した点に気付くだろうというのである。「礦」は採掘したままの鉞石、あらがね。「百練の精金」は鍛え上げた純金。徂徠学と朱子学の違いを譬える。注目されるのは、相手がたとえ外国人であっても自らの信条を忽せにしない、玄川の誠実な態度である。

鶴台もそれに対して「深く教えらるるに感ず。僕当に従容として尋譯すべきのみ」と答えている。玄川のほうでも「君子、己を虚にするの盛んなる、深く用って歎歎す。誠に此くの如くならば、後生の幸いなり。来世の幸いなり」と付け加えていた。

この議論を側で見ていた秋月は、徂徠の「華訓読経の法」を広めた点を評価し、問題はあるものの、「僕亦た謂えらく、物子は富嶽と高

さを齊しくし、日東の一巨手と為す可し。工みに此の人を訶せんと欲するには非ざるなり。足下其れ之れを思え」とも述べている。「訶」は責めること。

鶴台はそれに対して、

高意、謹んで領す。物子も亦た孝弟忠信を外にして、道と為すにはあらず。且つ僕、前に所謂る苟にも国治まり民安くば、則ち復た何をか求めん。何ぞ必ずしも學術の異動を争わんや。

と玄川たちに送った書簡で述べた持論を繰り返している。秋月は「但だ参辰の別を叙する好し」と受け、鶴台も「正に是、正に是」と肯定している。「参辰」はいわゆる参しんと商しん。参宿（オリオン座の三つ星）と商宿（蠍座のアンタレスを囲む三つ星）は百八十度反対にあって、遠く離れたものどうしを譬える。

このようなやりとりを見ていて、思い合わされるのは村瀬栲亭（一七四六〜一八一八）のことである。栲亭は『枕苑日涉』巻一の冒頭、「国号」三において徂徠・春台を批判し、次のように述べているのを玄川ら一行に聞かせることができなかつたのが惜しまれる。

茂卿の教えを設くる、礼樂を以て、道と為す。殊に知らず、礼樂は教えの具にして、道の名に非ざるを。本立ちて後、道生ず。道生じて後、教え有り。故に礼樂の本は、五典に在り。五典の原は、心術に在り。心術正しからざれば、則ち礼樂備わると雖も、小人為るに害無し。故に其の著わす所の『弁道』『弁名』は、發揮する所無きに非ずと雖も、大本已に失す。其の余は幾何ぞ。遂に輕薄浮誇の風を啓いて、學術は之れが為に一変す。即令たと其の文芸の大いに人に過ぎたる者有れども、功、罪を償うに足らず。惜し

いかな。

(文化四年刊本)

栲亭は兼葭堂と比べて十歳の年少、南冥との年齢差はわずかに三歳ながら、京都で始まった反徂徠学の流れのなかで、このような見解を抱くに至ったが、惜しむらくは通信使来日後のことだった。

さて、思いがけず長文となったこの節を、玄川の言葉を引用して締め括ろう。

別来、已に茲に五朔なり。毎に覚ゆ、鶴台の風韻の人を襲うを。

今又た相い逢うも、是れ別筵。一天南北、片月分留し、相い思い、相い看る。唯だ此れのみ。大麓・嵩山諸人、遂に更に之れを見ざるは、尤も悵す可し。唯だ前に所謂る風流の洋溢する者、携えて帰袖に満つるのみ。

「五朔」は五ヶ月。こうして「帰袖」に詰めた「風流の洋溢」する思いが、玄川の日本評価を強く後押ししたものと思われる。

4

備前岡山藩が迎接した牛窓での唱酬は『榎客萍水集』（東京都立中央図書館蔵写本）によって見ることができ。まず市浦直春、字子木、号南竹が、藩校督学として他の儒者とともに出迎えの先頭に立ち、製述官以下の人々に次のような歓迎の詩を贈っている。

皇華遥指海東天 皇華 遥かに指す 海東の天
渺々波濤泛客船 渺々たる波濤 客船を泛かぶ
交久千秋異方信 交は久し 千秋 異方の信
名高万里使臣賢 名は高し 万里 使臣の賢

脩盟玉帛臨賜谷 脩盟 玉帛 賜谷に臨み
観国衣冠映綺筵 観国 衣冠 綺筵に映す

駅路猶寒春雪裏 駅路 猶お寒し 春雪の裏
才毫幾和郢歌篇 才毫 幾たびか和す 郢歌の篇

「皇華」は派遣された使者。「玉帛」は玉と絹、王・諸侯間の礼物に用いる。「賜谷」は太陽が昇る東方の場所。「観国」は国見すること。「綺筵」は美しい宴の場。「才毫」は文才のある詩文。通信使の作。「郢歌」は楚の卑俗な歌。ここでは日本の詩篇を指している。これに對して、玄川の「南竹に和す」と題する作は次のとおり。

高閣虚明新月天 高閣 虚明 新月の天
門前春色繫楼船 門前 春色 楼船を繫ぐ
百年跡倦寰中夢 百年 跡は倦む 寰中の夢
一榻人逢海外賢 一榻 人は逢う 海外の賢
紅日扶桑看客路 紅日 扶桑 客路を見る
素琴流水擁寶筵 素琴 流水 寶筵を擁す
呉金楚玉多新彩 呉金 楚玉 新彩多し
不妨詩収邦国篇 妨げず 詩の邦国篇に収むるを

「虚明」は虚しい明かり。「新月」は三日月。「楼船」は櫓のある船。「寰中」は世の中。「紅日」は太陽。「素琴」は飾りのない琴。「流水」は流れ。

先述の井上四明、名は潜、字仲竜、号四明も岡山藩儒として応接し、次のようなエピソードを伝えている。

潜曰く、之れを道路に聞く。同じく玄公は才俊の人、且つ我が国

風の仕を善くするを知ると。信なりや否や。

潜、すなわち四明がこう尋ねた相手は成大中だった。「国風の仕」は和歌。ところが、

竜淵曰く、「玄公は誰をか指す」と。

潜曰く、「上々官中直大夫玄公なり」と。

竜淵曰く、「道同じからざれば、相為に謀らず。玄公の芸、僕の知らざる所、而して其の風流は素より弊邦に称する者有り」と。

この応対は後に見るように、両者の親交を知るものにとっては不思議な感じがしないでもないが、このころはまだそれほど親しくなかったからであろうか。

玄川はまた、近藤西涯とも次のような興味深い対話を交わしている。

玄川曰く、「曾て聞く、貴邦の人、清氣太だ多く、以て質慤しつかくの風に至るは乏少と云う。今日、筑前より此に至るまで、多く儒士に接す。重厚忠信にして、大いに前聞に異なり。豈に時の移り易ること有りて、氣化流通するや。甚だ賀す、甚だ賀す。第だ略ぼ土風を見るに、程朱を識らずして、好んで明儒主陸の説を語る。未だ高明の見を知らず。何の論を主とするや」と。

西厓曰く、「承る、公曾て聞く、弊邦の人、質慤の風に至るは乏少と云うを。百年前、戦国を距つること遠からず。想うに、当に公の聞く所の如かるべし。他邑の如きは、僕未だ詳らかに知ること能わず。弊邑に至りては、学は程朱を主とす。実に我が先寡君烈公の余沢なり。学問の道は他無し。居敬窮理、以て聖人に至るを求むるのみ」と。

玄川曰く、「甚だ感ず、甚だ感ず。僕固より已に之れを疑えり。大抵朱子の学は、天に日中するが如し。学の程朱を宗とせざるは、皆な異端なり。諸賢幸いに益すます自ら勉めよや。他説をして侵淫せしむること無かれ。一人此れを講ずれば、世道に於いて大いに利益有らん」と。

玄川曰く、「徂徠・独嘯ひな、僉尊も亦た之れを知るや、否や。是れ想うに、篤学の士にして、其の説の純ならざるを惜しむ可し」と。

西厓曰く、「然り」と。

玄川曰く、「長門の滝鶴台弥八、尊、雅よみ有りや、否や。為人ひと甚だ忠厚、学も亦た博雅」と。

西厓曰く、「長門は此を距つること遠遠、鶴台と雅無し。未だ其の為人を詳らかにせず」と。

「質慤」は飾り気がなく誠実であること。「乏少」は、とぼしい。玄川はかねて日本人は誠実に欠けると聞いていたが、藍島・赤間が関での交流を通じ、どうやらそうではないらしいことに気付き、それをここで確かめようとしたのである。「氣化」は氣の変化。なおこの「豈」は、反語ではなく疑問の意。ただ遺憾なのは、宋学を無視して明学が流行っていることだった。「先寡君烈公」は岡山藩主、池田光政(一六〇九〜八二)で、閑谷学校の創設や、熊沢蕃山(一六一九〜九一)の登用で、名君として知られていた。「侵淫」は、ひたすこと。この対話でもうひとつ注目されるのは、徂徠の評価が全面否定ではなく、何はともあれ「篤学の士」と肯定的に評価されるようになったことである。

5

ところで冒頭で触れた宮瀬竜門と玄川は、「詩」について次のよう

な問答を交わしている。

玄川曰く、「詩は性情に本づく。若し雕鏤のみならば、則便ち是れ詩ならず。然らずんば則ち三百篇何を以てか三経の一と為さんや。幸いに深く之れを思いて、力を本源の地に致せ」と。

竜門曰く、「吾が道とする所の者は、詩書執礼、是れ洙泗の本源に非ずや。詩は性情に本づくと雖も、則ち宋人議論を以て温厚和平の旨に充つるが若き、恐らくは三百篇の旨に背かん。公の論する所、必ずや余を以て詩に専らなる者と為さんか。必ずや以て記誦文字の俗学と為すなり。余、深く愧づ。亦た唯だ学ぶ所、口を開けば、則ち諸公に抵悟す。余は敢えて論ぜざるなり。摛藻華の若きも、徳行に益亡し。是れ戒慎する所なり。敢えて明教を奉ず」と。
〔東槎余談〕下)

「洙泗」は洙水と泗水、孔子が教えたところ。「摛藻」は文章を展開すること。このように徂徠学派に近い人々とは議論はなかなか噛み合わなかったが、大典(一七一九〜一八〇一)とはまた別の交流があったことが、大典の玄川宛て書簡によって知られる。

公は道学の君子、旁ら内教に及ぶ。亦た惟だ窮理の造、以て其の大を為す。衲、少くして文を好むも、其の道に非ざるを以て、志を致すことを果たさず。今に迨びて、道も亦た成らず、文も亦た能わず。犬馬の齒、終に溝壑を分とす。凶らざりき、一たび異邦の賓に周旋することを得んとは。又た顧眄の厚きを辱けなくす。蓬心、之れが為に揚揚如たり。恨む所は乍ちに会し、乍ちに別るること。
〔朝鮮の元子才に与う〕、『小雲棲稿』十二)

「溝壑を分とす」は人から生活の糧を得る身の上。「蓬心」は、ねじけた心。

また続く書簡にも、

況んや公と衲と同庚、気類較や同じくして、一は則ち僧を以て指を世教に染め、一は則ち儒を以て旁ら内典を尋ぬ。其の情の合し、機投すること、一朝に之れを殊方万里の人に得たり。抑も何ぞ希奇なる。
(同上)

と真情のこもった文章が綴られている。玄川も『乗槎録』卷三のなかで、「筑常、持心極めて純正、本より名利の俗僧に非ず、多く古書を読み、往事を知る」と評している。

また木村兼葭堂の周囲でも、たとえば鳥山崧岳(？〜一七七六)が玄川に贈った詩には、

生別百年同死別 生別百年 死別と同じ

恩恩行色使人憂 恩恩たる行色 人をして憂えしむ

(二元玄川の朝鮮に帰るを送る)、『

『垂葭詩稿』安永二年、一七七三、刊)

というような詩句が含まれていたので、玄川の琴線に触れたのではなからうか。

こうした儒者や詩人との交流のほかにも、もう少し広い範囲の興味深いエピソードが同じ『乗槎録』卷三に記されている。三月十三日の条に、往路の大垣でのこととして「名護屋の女色と平安・大坂との優劣」の話題になって、玄川が「貴国、脂粉大いに盛んなり。恐らくは誨淫に涉らん」と注意したことがあったらしい。「脂粉」は紅とおしろい、化粧。「誨淫」は、みだらなことを教えること。当の本人はそのこと

を忘れて、この日、随行している那波魯堂(二七二八〇八九)に、

路傍の脂粉、来時に較ぶれば、極めて少なし。武州より已に然り。

という観察を語ったところ、魯堂はその理由を笑いながら次のように述べた。

これ先生の過化存神の妙を見る可きなり。

「過化存神の妙」は聖人が通り過ぎれば、その徳化があるように、玄川のいい影響を受けたということ。あまりの比喩に、それはどういふことかと尋ねる玄川に、魯堂が答える。

先生、之れを忘るるや。此れ先生の譏りに由るの故なり。(中略)

先生、曾て大垣に於いて、某人に対し、誨淫の譏り有り。先生、之れを忘るるや。

こう訊かれてそのことを思い出した玄川が、

此の言有りと雖も、家に伝え、戸に道うことの可ならんや。君が言、譏笑に涉るに似たり。君も亦た戯謔を善くせんと欲するか。

と問い返せば、魯堂は顔色を改めて答えた。「譏笑」は、そしり笑うこと。「戯謔」は、たわむれ。

然らず。弊邦の人、使行を視ること、天仙の下降するが若し。学士諸公の言に至りては、則ち片言隻字、国中に流伝すること、置

郵より速やかなり。伊の日、大垣の諸儒、先生の筆談を得て、相

い語りて曰く、「先生の此の言、我が一国の人に在りては、寿民丹と謂う可し。僕も亦た語りて曰く、「真に国を医するの言なり」と。四人出でて、之れを言えば、転相伝布す。故に路中、僕に問

う者甚だ多し。皆な曰く、「朝鮮の学士、我が脂粉を譏ること太だ盛んにして、誨淫の譏り有るに至ると云う。信なりや否や」と。僕も亦た伊の日、先生に聞く所の者を以て、之れに答う。其の後、婦女輩、皆な甚だ羞媿し、脂粉を以て面を露すを欲せず。此れより大坂に之く、千有余里、先生、第だ之れを觀よ。童女の外、必ずや脂粉を塗り、狼藉する者無からん。僕、何ぞ敢えて先生に戯れんや。

「置郵」は駅伝、早馬。「寿民丹」は人々に効く薬というほどの意。

「羞媿」は恥じること。「狼藉」は散らばり乱れること。こう聞かされた玄川は「失驚」して次のように記している。

此れ未だ信なりや否やを知らず。然れども僕輩、行語の間、率ね戯言し易し。或いは他人に相い伝説すれば、則ち愧ず可きの甚だしきなり。

これでは玄川も軽口も叩けないと思ったのではなからうか。しかし、この一件は通信使のなかでも殊に「学士」の一挙手一投足、ひいてはつぶやきの類までが人々に注目され、このような過剰反応を引き起こすこともあったことを伝えていて、興味を引く。

6

ところで、玄川の『乗槎録』巻一は日本事情の記述に当てられてい

るが、なかでも「人物」についての観察がなかなか鋭い。

人物は柔にして能く堅、堅にして亦た悠久なること能わず。弱にして能く忍び、忍んで亦た振起すること能わず。聡明にして、識偏り、敏銳にして、氣局せり。能く謙にして、人に譲ること能わず。能く恵にして、物を容るる能わず。新を好みて、奇を尚ぶ。近きを悦んで、遠きを忘る。静処を樂しみ、群居を厭う。本業に安んじて、分を守るを喜ぶ。守一は、之れを定むる規にして、敢えて一寸を進めず。一寸を退き、自己の力に食して、一芥を与うるを欲せず。一芥を取るは、大抵、是れ婦人女子の態にして、沈毅発揚の風無し。機巧に嘗々として、彩色彫鏤の間に珍玩す。然して勤勞して、怠らず。專一にして、雜うる無し。終日、危坐して、偷惰呵欠の色無し。故有れば則ち或いは達宵に至るまで寝ずして、常に自ら惺々たり。事に遇えば、則ち力を用うること齊一にして、各自尽くせり。已にして絶えて推委忤忌の習無し。是の故に人皇之れを用いて、無為の治を致す。秀吉之れを用いて天下に強莫しの寇を為す。家康の之れに駕するに至るに及びては、則ち又た各おの定分を守り、寂然無声にして、厚德弘量有るが如し。躬ら率いて之れを導けば、則ち暮月の治も掌に運らす可し。蓋し其の衣は温暖を取らず、食は滋味を求めず、早く起きて晏寝す。勞に服して、食力す。吾れ、天下に日本に如く者無きを恐る。其の身材は特に長き者無し。亦た至りて短き者も無し。少しく肥えて胖かなる者も亦た少なし。黧黒なる者、惡瘡浮腫無し。日夜清潔、顔癯せ神清み、絶えて昏睡する者少なし。居る所の几案の属、皆な整楚にして、一物の欹斜する無し。側置する者、戸に枢とぼそを施さず。扁障は低床を隔て、木薄きこと数寸、方径五寸、薄紙を用いて之れを糊し、以て明光を取る。小兒、其の中に群嬉

して、穿壞する者無し。蓋し地の朝暉に近きに由って、稟くる所の精明、児たりし時より已に自然の性有り。然して清勝にして、濁偏太だ少なし。魂余り有りて、魄は足らず。所以に中国より進むこと能わざるなり。生齒、日に繁く、人衆きこと魚の如し。女子の年十三四、咸な能く子を抱くも、亦た小天殤者は、其の衣食を節すと雖も、地の穀を生じて、尽く哺する能わず。故に村閭に六畜少なし。其の靡穀為るや、間ま煨芋烹諸有りて、以て口に就く。実は物盛んにして衰うるは固より其の変なり。吾れ其の久しく盈盛の業を享く能わざるを恐る。

「守一」は一つの信条を守ること。「食力」は、自分の力で生計を立てること、「礼記」礼器の疏に「食力は工商農庶人の属を謂うなり。力を陳べて業に就き、乃ち食を得」と見えるとおりである。「一芥を……」は、『孟子』万章篇に、「其の義に非ず、其の道に非ざれば、一芥も以て人に与えず、一芥も以て諸を人より取らず」とあるのに拠る。ちなみにこの条の金谷治博士の注釈では「堂々たる大丈夫の態度」（新訂中国古典選、朝日新聞社、一九六六年、三一三頁）とされているが、玄川はここではその反対の「婦人女子の態」というのである。「危坐」は正座。「偷惰」はかりそめに安易をむさぼること。「呵欠」は、あくび。「推委」は、なげやり。「忤忌」はそこない、嫌うこと。「暮月の治」は『論語』子路篇に孔子の言として「苟くも我れを用うる物あらば、期月のみにして可ならん。三年にして成すこと有らん」とあるように、一カ年の期間があれば政治の実効を挙げるということ。「晏寝」は晩遅く寝ること。ここには粗末な衣食で朝早くから夜遅くまで働く日本人の生き方が、「天下に日本に如く者無きを恐る」というふうには「恐ろしさ」として捉えられているのも注目を引く。「黧黒」は黄色を帯びた黒色。「惡瘡浮腫」は、はれものやできもの。机の類

がきちんと整頓されているのも、明窓浄机の手本である。「扁障」は障子。「穿壞」は穴を開けて壊すこと。子供が障子紙にいたずらをして穴をあけることもないのは、地域が朝日に近いので「精明」の気を稟けているからだというの、誉めすぎだろう。「魂」は精神をつかさどり、「魄」は肉体や形質をつかさどるとされる。「生齒」は人民、人口。「六畜」は、食用にする馬・牛・羊・鶏・狗・猪などの家畜。「盈盛」は満ちて盛んなこと。

玄川のこの観察が使行中の見聞に基づいているとすれば、すぐれた人間観察者ということが出来る。「新を好みて、奇を尚ぶ。近きを悦んで、遠きを忘る」という条など、現代日本人にもそのまま当てはまりそうだ。「終日、危坐して、儉惰呵欠の色無し」という点は現代人には厳しいかもしれないが、一昔前の日本人ならそれこそ朝飯前だったろう。

またたとえば、「江戸の国為る所以は、一に曰く、武。二に曰く、法。三に曰く、智。四に曰く、恩。仁義礼楽・文章政事に至りては、一も存する無し」というような観察には、それまでの情報収集が役立っているかもしれないが、幕政の本質をよく捉えている。玄川はこうしていつしか日本事情通になっていたのである。

7

前章までが日本滞在中の動静であるが、これから帰国後の様子を一瞥しておきたい。成大中の『青城集』に玄川が登場するのは、巻一に収められた「雨中、玄川元子才重拳を懐かしむ、唐人の韻を用う」が最初である。

扶疎野態強名官 扶疎野態強いて官に名づく

柳市東頭菜畝寛 柳市東頭菜畝寛し

忙処方知間処好 忙処方に知る 間処の好きを
説時須念做時難 説時 須く念うべし 時を做うるの難きを
夜深庭院偏生響 夜深けて庭院 偏えに響を生ず
秋半槐梧特作寒 秋半ばに槐梧 特に寒を作す
千里相思雲水地 千里相思う 雲水の地
海槎猶記隔年歎 海槎 猶お記す 隔年の歎

「扶疎」は木の枝葉が広がるさま。「野態」は鄙びたかたち。「間処」はしずかに暮らすこと。まことに忙しくなつてはじめて「間処の好き」点が再認識されるのである。「槐梧」はえんじゅと桐。「海槎」は海に浮かべたいかだ。通信使船を指す。「隔年」は年を隔てること。通信使行の「歎」しかった思い出は、次の詩にも出てくる。

子才宅遇林伯厚。東海後顔面也。其喜可知。有詩志之。伯厚時
趁漾湖祥期来。因之入城。(子才宅、林伯厚に遇う。東海後の
顔面なり。其の喜び知る可し。詩有り、之れを志す。伯厚、時
に漾湖の祥期を趣いて来る。之れに因りて入城す)

当时意气動江湖 当时 意气 江湖を動かし
邂逅于今半雪鬚 今に邂逅すれば 半雪の鬚
荷製自鮮寧待浣 荷製 自ら鮮しく 寧ぞ浣うを待たん
鶴身長健不妨癯 鶴身 長健にして 癯するを妨げず
龐家妻子能炊黍 龐家の妻子 能く黍を炊き
徐孺行装有束芻 徐孺の行装 束芻有り
好是東州偕隱地 好し是れ東州 偕に隱地
孰為司馬孰申屠 孰れか司馬為り 孰れか申屠

「林伯厚」の名前は他所にも散見するが、いかなる人物か詳らかにし

(同上、卷二)

ない。「東海後」は通信使行の後。「顔面」は面会。「漾湖」は金元行（一七〇二〜七二）。「祥期」は忌み明けの祭。「江湖」は世間。通信使行のさいは意気軒昂だったことがわかる。「荷製」は蓮の葉で製した衣、隠者が着用する。「龐家の妻子」は、龐徳公の家族。後漢の人龐徳公は、劉表が召しても応じず、妻子を伴って鹿門山に隠栖した。その人に元玄川をたとえる。「黍」は鶏とともに客を心からもてなすキビ飯。「徐孺」は後漢の徐穉。「恭儉義讓」で知られた高士。郭林宗の母の喪に、生芻一束を廬前に置いて弔った。すると林宗はこれは徐孺子にちがいない、詩にも「生芻一束、其の人玉の如し」（『毛詩』十八）とあるではないか。私にはそれに見合うだけの徳はないと言ったという（『蒙求』下）。「束芻」は束ねたまぐさ。この徐穉に林伯厚を擬えた。「申屠」は、「蒙求」の先の条に続いて、「申屠断鞅」の章がある、申屠剛のこと。直諫の人として知られる。

また卷二冒頭の「自警、兼ねて子才に示す」にはこう詠まれている。

有守身長穩 守り有れば 身は長穩なり
無求体自寛 求め無ければ 体自ら寛く
若要完気節 若し気節を完うすること を要むれば
先学耐飢寒 先ず飢寒に耐うることを学べ
布褐軽堪着 布褐軽ければ 着るに堪え
黎羹淡可餐 黎羹淡なれば 餐す可し
平生安樂法 平生 安樂の法
留待後人看 留めて後人の看るを待つ

（『青城集』二）

最初の一二句は、守りの姿勢で生きてゆけばそれなりに穩やかに暮らせることをいう。ところが「気節」は気骨があり、正義を守ることなので、そうした生き方を貫こうとすれば抵抗も多く、困難な生活、す

なわち「飢寒」に耐える覚悟が必要となる。「布褐」は布と毛の交ぜ織りで、賤者の衣服。「黎羹」はあかぎのあつもので、貧者の食べ物。粗衣粗食は身には「軽」く、胃には「淡」泊で消化にもいいので、「安樂の法」と言えなくもないという「自警」を「後人」はともかく、まず玄川に聞かせたかったのではなからうか。

というのも、玄川の人生はどうやら順風満帆ではなかったらしいからである。たとえば大中の次のような文章を読めば、玄川の置かれていた状況が察せられる。

送元子才赴任木川序（元子才の木川に赴任するを送る序）

宦禄は命に係り、政事は学に基づく。吾れ之れを經に聞くこと、此くの如し。而るに世の遊談する者は、乃ち曰く、「官は必ず勢を抜きて得、専ら之れを命に委ぬ可からず。政は必ず法に任じて成る。専ら之れを学に出だす可からず」と。是の説や、一世に之れを奉ず。前哲の教えを尊び、彼の俗に徇う者は、固より道うに足らざるなり。間ま或いは志を道に有する者も、乃ち亦た己を枉げて之れに徇う。甚だしいかな、俗説の惑い易きや。吾れ誠に自ら量らず、公に排して、力めて之れを斥く。然れども力弱くして自ら振るうこと能わず。且つ以て証と為す無きなり。世の吾れを信ずる弗きは固よりなり。

幸いにして元子才を得。子才は吾が老友なり。常に特立独行を以て志と為す。隠居して教授し、人に知らるるを求めず。然して官を得るも、亦た人に後れず。嘗て松羅丞と為り、官に到ること、才かに六十余日、謫官者来たりて之れに代わる。子才、一馬を控えて返る。之れに従り、泣く者一駅を傾け、其の復た来るを祝り、歳を弥りて衰えず。子才は譽れを干むる者に非ずして、民の之れを愛するの甚だしきこと、此くの如し。其の政を為すや、知る可

きなり。惜しむらくは、以て其の用を尽くす無きなり。子才も亦た自ら用いられざるを知る。室を尽くして砥平山中に入り、將に耕牧を以て終わらんとす。持銓者、適たま其の名を聞き、之れを挙げて掌苑郎と為す。世皆な其の公拳を頌む。而るに子才は一たびも往きて其の門に謝さず。職を守つて奉公し、一に古道を以てす。是れを以て時に忤らわると雖も、少しも貶められず。期仕満ちて則ち去る。

而るに乃ち今、木川の宰を得て、以て去る。夫れ蔭仕にして一宰を得れば、則ち世の榮耀とする所にして、子才は乃ち安坐して之れを得たり。命に任ずるに過ぎざるなり。命は豈に子才の独り有する所ならんや。学んで以て政に従うは、君子の常なり。政の学を迂るは、豈に学の誤る所ならんや。而して法を尚ぶ者、従いて之れを警る。亦た之れを知ることの浅からずや。君子の学に貴ぶ所の者は、以て其の体を明らかにして、用に適するなり。効の小大は、惟だ其の用の如何のみ。木川は小なりと雖も、然れども亦た民社の職なり。顧みて足らざれば以て学ぶ所を展せんか。乃ち君子の法に任ずる者の若きは、身を持するに法を以てすれば、則ち正し。吏を馭するに法を以てすれば、則ち嚴。悍民を御するに法を以てすれば、則ち格。故に政にして法を知らざれば、亦た以て学と謂うに足らず。是れ固より子才の優る所なり。其の治を為すが若きは則ち松羅の成績、丞と宰と、何の異か在らんや。余は則ち特に幸いに吾が説の証有りて、以て自ら強くするに足るなり。是に於いてか書す。

〔青城集〕五)

「宦禄は命」に、「政事は学」に基づくのは当然であろう。「遊談」は遊説者のいい加減な作り話。彼らは官位俸禄を得るには勢力のあるほうが有利だと、したり顔で説いてまわり、世間もまたそれを信じがち

になる。大中はこうした誤った考えを何とか改めたいと思いつながら、非力ゆえにいかんともしがたく切齒扼腕していたところに、うれしい例外が現れた。元玄川の場合である。「特立」とはひとり志操を堅持すること、もとより容易なことではない。『孔子家語』卷一には「世治まるも軽々しくせず、世乱るると沮まず、己れに同じくとも与せず、己れに異なるとも非らざるものあり。その特立独行、かくの如くなる者あり」(儒行解、岩波文庫、八八頁)と見える。それがいったん「松羅丞」となり、「謫官者」すなわち左遷された役人のとぼちりを受けて、官にあることわずかに六十日で離任するさいには、民は挙つてそれを惜しみ、泣き悲しむ姿が駅にあふれたのも、玄川の政事がいかに優れていたかを証し立てるものだろう。しかしその機会を失つたらさつさと「砥平山中」に隱退して、一家で「耕牧」すなわち田を耕し、家畜を飼うことにした。ところが「持銓者」選考者はちゃんと見ているとみえて、玄川はやがて「掌苑郎」となり、さらに「木川宰」に抜擢された。「蔭仕」は先祖功績で子孫が官位をもらうこと。「安坐」は何もせずにいること。玄川は先祖のお陰ではなく、いわば「命に任ずる」に過ぎないと大中はいう。これこそ「君子の学」の理想とするところである。この大中の力説は、これが少数の事例であったことを示しているだろう。「悍民」は荒々しく邪悪な民。「丞」は副官で、「宰」は地方の官吏。

ところが朴齊家(一七五〇〜一八〇五)号楚亭の「元玄川重拳を送る序」には、次のように記されている。

今の士大夫は、科挙に非ざれば、以て仕宦に入る無し。門閥に非ざれば、清要を擅にすること能わず。夫れ科挙の必取とすれば、則ち士自鬻の行有りて、廉恥は立身の先に崩る。門閥を尚しとせば、則ち官は人を扱ぶの実無くして、貴賤は有生の初めに判る。

世道の衰うるは、職として此れ之れに由るか。故に名位の偶たま
 顕わるるのみ。能く其の親戚姻婭の例襲を禁せんか。方正の或い
 は擢んでられん。而して已に其の浮華踈競の雜進に勝えず。則ち
 是れ国家造士黜陟の命、僥倖黯昧の地に寄するなり。而して先
 王の名分爵禄の器、常世私門に仮りて、公を天下に共にせざるな
 り。然り而して、清要の途は一にして、閥閥の族、日に盛んなり。
 仕宦の数は加わらずして、科挙の目は日に繁し。日に盛んに、日
 に繁しの徒を以て、一清要の途、加わらざるの仕宦に処して、其
 の人なる者も又た皆な浮譁雜進の中より出づ。而して又た地醜に
 して、徳斉し。肯えて久しく相下らず。勢激せざるを得ずして、
 変を生ず。

是に於いて朋党なる者有りて出づ。而して分れて二と為り、裂け
 て四と為る。時に乗じて互いに擠す。一進にして一退。相殺戮す
 るに至りて、後已む。則ち衣冠化して干戈と為る。論議は仇敵よ
 り甚だし。而して世道遂に墮ちて、大壊す。茲より以往、已むを
 得ずして、羈縻の術を為す。其の氷炭薰蕕を合して、之れを示す
 に同じき所を以てす。常に其の官を数しば遷って、其の勢を均分
 す。数しば遷ることの足りずして、之れを躡奪す。躡奪の足り
 ずして、亦た何の至らざる所ぞ。此れ又た調停の論の由りて起こ
 る所にして、朋党の害、固より自若たり。

嗚呼、今の士大夫は、既に皆な其の時を得て、其の地に拠れば、
 則ち自ら来るの位を取る。室中の物の若くして、又た各おの其の
 子弟をして汲汲として功令に習い、章句を攻めしむ。以て其の余
 利を競う。又た各おの其の私人を擁し、其の名色を限り、相出入
 せざらしめ、以て朝廷に相標榜す。否らざれば、則ち猶お以て其
 の曾高の遺蔭を活るに足るがごとし。以て一方に号令し、膏腴の
 地を割き、以て自ら營殖す。安坐して、遊食する者は、抑も且に

幾万人の多きにして、茲に数百年なり。土地人民は国の有に非ざ
 るなり。黜陟爵禄は、国の用に非ざるなり。是の時に当たり、科
 挙閥閥朋党の言、国中に盈つ。天下の勢、此に帰せざれば、則
 ち彼に帰す。久しくして乃ち習いて故常となる。以て性命義理の
 固より此に出でずと為すが若きは、是れ古にして今に非ざる者
 は信ぜず。道を守りて、独行する者は疑わる。愚、或いは余り有
 り。智、或いは足らざる者、此の時に若くは莫し。

夫れ科挙繁くして、躁競と成る。門閥勝ちて、賢才滞り、朋党盛
 んにして、殺戮興る。遊食する者衆くして、民は貧なり。調停の
 論起りて、是非混ず。国の元氣は、日に冥冥の中に鑠す。而し
 て匹夫匹婦は、故無くして、囂然として其の生を楽しむの心を喪
 う。向に世道の弊は二にして、其の末や三。向に世道の弊は三に
 して、其の末や五。その他、礼に無きの礼は、先王の法に非ざる
 なり。所以に苛察して區別する者は、又た幾ばく有るかを知らざ
 れば、則ち嗚呼。其れ今の士大夫は、何ぞ其の紛紛として節目の
 多きや。
 『貞菴閣集』一

ここまでがいわば長い前置きである。「清要」は重要で高貴な、しか
 し雑務の煩いのない官職。当時、仕官の道は科挙に合格し、さらに門
 閥貴族であることが有力な条件だった。「自鸞」は自分の身を売って
 人に使われること。こうして古来の順風美俗は損なわれる。「黜陟」
 は功のない者を退け、功のある者を挙げ用いること。「羈縻」はつ
 なげられること。「薰蕕」は香草と悪臭の草、『孔子家語』には「薰蕕は
 器を同じうして蔵せず」（致思）とある。「躡奪」は踏みにじって奪う
 こと。「自若」は少しの変化もないこと。弊害は依然として温存され
 るわけである。「功令」は学事に関する法令。「章句を攻」むには、文
 章の末にこだわって大切なことを忘れるという批判的な意味が込めら

れているだろう。「曾高」は曾祖父など代々の先祖。「遺蔭」はその先祖が遺したおかげ。「膏腴」は肥沃の地。「蹀躞」は人と勢位富貴を争うこと。「鑠」は溶かす。「匹夫匹婦」は身分の賤しい男女。「囂然」は世の中が落ち着かないさま。「苛察」は微細なことでまで調べることに「君子は苛察を為さず。身を以て物を仮(そこな)わず」(『莊子』天下篇、金谷治訳注・岩波文庫四)といわれるとおりである。「節目」は規則の簡条。当時、社会の空気を淀ませていた門閥の専横が糾弾されているのである。

そうした状態では玄川のように後ろ盾のない普通の人々の苦勞は並大抵ではなかったろう。朴斎家の「序」の後半には、果たして次のように記されている。

玄川元公、起家進士、郎署に浮沈すること二十余年、晚に一郵に除さるを得たり。旋いで罷めて以て去る。窮餓困躓、和光にして流れず。分に安んじて、時を知る。間嘗て書記に充てられ、航海して日本に之く。日本の人士、交口、玄川先生を称す。「元公は文学の長者なり」と。人も亦た稍稍、其の賢を訟う。

而るに卒に能く之れを挙ぐる者有ること無し。乃ち僻地を城南に得て、樹を種え、以て自給す。樹、苑然として長ず。即ち復た売りて、田を砥平の山中に買う。父子夫妻共に相い躬耕す。夫れ元公の志は、豈に久しからざらんや。而して業已に老いて白首たり。時に秋九月、灘水未だ落ちず。布帆既に具す。瞬息に東す可きなり。

嗟乎、丈夫の其の時を得れば、則ち廊廟も其の榮と為すに足らず。志を得ざれば、巖穴も其の貶と為すに足らず。彼の世間の所謂る富貴貧賤黜陟爵禄の物は、挙げて以て其の心を累すに足らざれば、則ち又た悪んぞ得て其の行を磨がんや。名声は殊俗万里の外に震

耀して、命は亨を加えざるなり。郎署に浮沈すること二十余年にして、道、約を加えざるなり。独り能く身を幾微の際に潔くし、意を埃壒の表に托す。以て顛沛して、屢しば移らず。以て遲暮して、節を易す。爰に約服を返し、聊か素好を遂ぐ。豈に難からざらんや。

嗚呼、今の士大夫は、科挙に非ず、門閥に非ず、朋党に非ざれば、上仕宦に及ばず、下工商に及ばず、附庸の国の若くして、人に行い、飢餓將に死なんとして、猶お且つ其の士大夫の号を冒して、農夫と為らんことを求めて得可からざる者有り。則ち又た何為る者ぞや。(同上)

「起家進士」は、官職につき立身する科挙の進士の試験に合格した者。「郎署」は宮中で宿衛する役所。「除」は官職を授けること。「困躓」は行き詰まって悩むこと。「二十余年」の宮仕えのあとで、「窮餓困躓」とはまたどうしたことであろう。「和光」は自分の能力を隠して、俗世間に交わること。「交口」は口々に。「苑然」は繁茂する様子。「白首」は白髪。「灘水未だ落ちず」とは水位が下がらないこと。「布帆」は船の帆。「瞬息」は一瞬一呼吸のしほしの間。「廊廟」は朝廷。「殊俗」は異俗。「加亨」はよい運勢になること。「幾微」は微かなきざし。「埃壒」はほこり。「顛沛」はつまずき倒れること。「遲暮」は次第に老いること。「約服」は一重の着物。「附庸」は天子に臣従せずに、大諸侯に属する弱小国。

細部が判明でないところがあるが、「今の士大夫」は条件が揃わなければ、「士大夫」の沽券を捨てて「農夫」となることもできないような閉塞状況に置かれていたことだけは間違いないようだ。

8

そうしたなかにおいて、北学派を形成する思想家たちに日本事情を伝えたのは玄川ら通信使経験者だったが、たとえば洪大容（一七三一〜一八三）字徳保、号湛軒の「日東藻雅跋」を一読すれば明らかとなる。

斗南の才、鶴台の学、蕉中の文、新川の詩、兼葭・羽山の画、文淵・大麓・承明の筆、南宮・太室・四明・秋江・魯堂の種種風致は、即ち我邦に論無し。之れを斉魯・江左の間に求むれども、亦た未だ得易からざるなり。況んや諸人なる者、未だ必ずしも極選と為さざれば、則ち其の余は想う可きに足るなり。寧ぞ左海絶域を以て之れを少なしとして可ならんや。然りと雖も、文風競いて、武力振るわず。技巧日に蕩き、鉄剣日に鈍れば、則ち西隣の并せて其の福を受く。厥の利は博きかな。伊・物二氏、宜しく以て吾が韓に尸祝すべし。（『湛軒書』三）

この前半部分に列挙されている人名のうち、「斗南」細合半斎（一七二七〜一八〇三）字麗王、「蕉中」大典、「承明」福原映山（一七三五〜一六八）らはすべて兼葭堂の友人で、そのほか岡田新川（一七三七〜九九）や那波魯堂（一七二七〜八九）らが含まれているが、これらの人々の詩作品を伝えたのがじつは玄川だった。それを見た大容は、日本の文人の学才のみならず「種種風致」までを高く評価し、彼の周辺はもちろんのこと、「斉魯・江左の間」すなわち孔子の生まれた魯と孟子の生まれた斉と、長江下流の江蘇・浙江省を含む中国にさえ、同様の例は容易に見出しがたいと絶賛している。このように「文風」が盛んになれば、反比例して「武力」は衰えるはずで、そうなれば「西隣」すなわち朝鮮（韓国）も同時にその「福」を享受することができ

るといふ。「伊・物二氏」は、むろん伊藤仁斎（一六二七〜一七〇五）と荻生徂徠。「尸祝」は、かたしるを立てて拜むこと。続いて後半部分。

玄川翁は、我が邦に在りて、落拓不遇なり。乃ち章甫を資として諸越に適き、口氣を出だすこと此くの如し。蛮貊の行、豈に信ぜざらんや。聖人海に浮かぶの思い、真に以有るなり。然して彼の伊・物の学、未だ其の説を詳らかにせずと雖も、要は修身を以て民を濟せば、則ち是れも亦た聖人の徒なり。其の学に因りて、之れを治むるも、亦た可ならずや。況んや性命を妄談し、漫りに仏老を闢くるは、真に仮りて偽を售り、吾が学に利莫し。豈に彼の稗穉の熟して、猶お以て荒を救うに足るがごときに若かんや。玄翁の正学を明らかにして、邪説を息（や）むるは、先務に急と謂う可からざるなり。（同上）

「落拓」は落ちぶれるさま。「章甫」は殷王朝時代の冠。これを越に持つて行って売ろうとしたところ、「越人は断髪文身にしてこれを用うる所なし」（『莊子』逍遙遊篇）だったという譬えは、玄川の日頃の主張が渡航先の日本で通用しないかもしれないことを示唆すると解するのは穿ちすぎだろうか。「口氣」は物の言い振り。「蛮貊」は南北の異民族。「聖人海に浮かぶの思い」は、『論語』公冶長篇に、「道行われず、桴に乗りて海に浮かばん」とあるのに拠る。「性命を妄談」していたのは、李子朝鮮の支配的な朱子学者たちで、「吾が学」とは相容れないものだった。「稗穉」はイネ科の雑草で、家畜の飼料とされる。しかしそのような粗末な食料でも「荒を救うに足る」のである。「先務に急」は、『孟子』尽心篇上に、「堯舜の知にして物を知るに」からざるは、先務に急なればなり」と見える。大容がここで、玄川の偏

狭な朱子学者としての態度をたしなめつつ、日本事情を有効に活用しようとしているのが注目される。

大容はさらに「元玄川の田舎に帰るに贈る」二首を作っているが、その第二を引用しよう。

銀海溱無垠	銀海溱として垠無し
島夷有名都	島夷名都有り
磅礪富士山	磅礪富士山
宏闊琵琶湖	宏闊琵琶湖
伊藤既鳳拳	伊藤既に鳳拳
徂徠亦鴻儒	徂徠亦た鴻儒
四海皆天民	四海皆な天民
賢俊非一途	賢俊一途に非ず
偉哉玄川翁	偉なる哉玄川翁
耿介懷遠図	耿介遠図を懐う
譚経篤倫綱	譚経倫綱に篤く
衛道崇孔朱	衛道孔朱を崇ぶ
翰墨亦有神	翰墨亦た神有り
照耀紅氍毹	照耀たり紅氍毹
斗南朝列侍	斗南朝に列侍し
鶴台夕趨隅	鶴台夕べに隅に趨う
言貌雖異俗	言貌俗を異にすと雖も
氣義皆吾徒	氣義皆な吾徒
韓人矜褊心	韓人褊心を矜り
深文多譎誣	深文譎誣多し
偉哉玄川翁	偉なる哉玄川翁
博愛遵聖謨	博愛聖謨に遵う

(『湛軒書』内集三)

「銀海」は月光に照らされた海面。「溱」は水が広々とてはしないさま。「島夷」は海上の異族、日本を指す。「名都」は立派な都。「磅礪」は広大で限りないさま。「伊藤」は既出の仁斎。「鳳拳」は高く舞い上がることで、活躍中の意。徂徠は「鴻儒」すなわち大儒。これら「鳳」「鴻」いずれも、両者への親近感と敬意を表している。これによって、「四海、皆な天民」という次の言葉が引き出されたとすれば、素晴らしいことではなからうか。天下いずこであれ、みな天の民というのは、ほとんど『論語』顔淵篇の子夏の言葉、「君子は敬して失無く、人と恭しくして礼有らば、四海の内は皆な兄弟たり」と同義である。この広い世界には様々な考え方や生き方があって、「賢俊、一途に非ず」ということにならざるを得ない。「耿介」は節操を守って、世俗におもねらないこと。「遠図」は遠大なはかりごと。「氍毹」は毛氍。「趨隅」は『礼記』曲礼上に、「衣を摺って隅に趨い、慎しんで唯諾す」とあり、「列侍」は大勢で並び、ひかえることであるが、ここでは細合斗南や滝鶴台たちがそのようなマナーに従って生きる君子として位置づけられている。「言貌」言葉や顔つきはちがっても、「義氣」義理を重んじる心は「吾が徒」というのも、「四海、皆な天民」と同じ発想である。「褊心」は度量の狭い心。「深文」は奥深い内容のある文章。しかし実はそのように見せかけて、「譎誣」つまり人をそしって、陥れるような文章が多いのに、玄川の場合はそれとは異なって、「博愛」精神が「聖謨」聖人の教えに従っている点を、大容は高く評価しているのである。その評価の先に日本の儒者や詩人が控えていたのはい言うまでもない。

先ほどの朴齊家にしても、「戯れに王漁洋の『歳暮、人を懐かしむ』六十首に倣う」として友人を列挙したなかに、玄川も含まれ、

吐納青霞日出浜 青霞を吐納して日に浜を出づ

玄川奇氣幕中賓 玄川の奇氣幕中の賓

元知詞賦非華国 元知る 詞賦は華国に非ざるを

独采風謡善規隣 独り風謡を采り善く隣を規う

〔貞蕤閣集〕初集

と詠まれているのは、玄川が単独で日本の詩を収集し「善く隣を規」つたと認められていた証左である。「青霞を吐納」するとは青い霞を呼吸すること。道家の修煉の術として、悪濁の気を吐き出し、清新の気を吸い入れることをいう。「幕中の賓」は幕僚。

9

青莊館、李德懋（一七四一〜九三）字懋官、号炯庵・雅亭の玄川への言及がいくつかあるうち、「日本蘭亭集」の最後にはこう記されている。

周南・滝弥八に送る詩有り。弥八は名、長凱、徂徠の高弟なり。

癸未の歳、元玄川の日本に入るや、弥八と筆談し、嘗に博学謹厚を称し、風儀観る可しと云う。蘭亭の詩、及び墓誌を読むに、文

風の大きに振るうを知る可し。明を失いて、詩を能くす。海外の唐仲言なり。〔清脾録〕一、『青莊館全書』三十二

これは徳懋が平壤で見かけた高野蘭亭（一七〇四〜五七）の詩集『蘭亭先生詩集』（宝暦八年、一七五八、刊）へのコメントである。「周南・滝弥八に送る詩」は、卷五所収の「周南・滝弥八に寄す」の一首を指すものだろうが、丁寧に目を通さなければ見逃されたはずである。なお「唐仲言」は明から清にかけての盲目の詩人、唐汝詢（一五六四〜一六六〇）で、仲言は字。『唐詩正声』『唐詩選』の箋釈『唐詩解』な

どの著述がある。

同書にはまた、木村兼葭堂を初めとして多くの日本の文人への言及があり、そこには次のような記述も見える。

嗟呼、朝鮮の俗、狹陋にして、忌諱多し。文明の化久しきと謂う可きも、風流文雅は反って日本に遜る。挟無くして自ら驕り、異国を凌侮す。余は甚だ之れを悲しむ。善いかな、元玄川の言に曰く、「日本の人、故より聡明英秀多し。心肝を傾倒し、襟懷を爛照す。詩文筆語、皆な貴ぶ可くして、棄つ可からざるなり。我が国の人、夷として之れを忽せにし、毎に驟しば見て、訛毀を好む」と。余、嘗て斯の言に感有りて、異国の文字を得て、未だ嘗て拳々として愛さずんばあらず。嗚だ朋友の心に会する者の如きのみならざるなり。

さらに同書巻四にも、「蜻蛉国詩選」と題する以下のような文章がある。

柳恵風の『巾衍外集』に『蜻蛉国詩選』を載す。因りて之れに序して曰く、「癸未、元玄川重挙、日本通信使従事官書記の選に膺る。玄川翁は雅に篤厚にして、程朱の学を談ずるを喜ぶ。彼の中に益々之れを重んじ、必ず老先生と称す。其の能文の士は、率ね医官・釈流多くして、合離・井潜・那波師曾・富野義胤・岡田氏兄弟、尤も傑然たりと為す。皆な之れと深く相交わり、其の帰後に及び、其の日本文士の贈別詩を抄して、編みて二冊と為し、李薑山従いて之れを選び、六十七首と為し、名づけて『蜻蛉国詩選』と曰う（案ずるに日本の地形、蜻蛉に似る。故に自ら蜻蛉国と称す―割注）。其の詩の高き者は、三唐を模擬す。下る者も王・李

に翱翔す。侏離の音を一洗す。多とするに足る者有り(柳の序は此に止まる―割注)。」

(『青莊館全書』三十五)

これは柳得恭(一七四八―一八〇七)の「日東詩選序」に、

日本は東海中に在り、中国を去ること万里、最も我れに近し。其の国の著わす所の『和漢三才図会』の書を取りて攷うれば、則ち詩書礼楽・戦陣の法より、以て桑門外道博奕戯具に至るまで、我れより之れを得ざるは莫し。

(『冷齋集』七)

と書き起こして、ほぼ先ほどの引用が続いている条を指しているが、そこには「万曆の間、侵寇を業と為し、遂に壬辰の役有り。此れを以ての故に、輒ち中国の擯絶して与に通わざる所と為る」というような記述も見える。いずれにしても玄川の編集した「二冊」のアンソロジーを「李薑山」李書九(一七五四―一八二五)素玩亭・冷齋がさらに選んで『蜻蛉国詩選』が出来上がり、李德懋・柳得恭・李書九らのあいだで共有されていたことがわかる。

ところで、玄川の日本情報をこうして真摯に受け止めた人々のうち、まず洪大容は一七六六年に燕行使に随って出かけた清朝の北京で潘庭筠・嚴誠・陸飛の杭州出身の科挙受験者と出会い、親交を持つに至った。ついで一七七七年、柳得恭は叔父の柳琴に依頼して、李德懋・朴齊家・李書九とともに編集した選詩集『巾衍集』を清朝の文人、李雨村・潘庭筠の二人に見せ、それぞれ評および序文を書いてもらうということがあった。そしてこの後、これらの人々も燕行使について北京を訪れ、やがて北学派を形成した。その起点に玄川の活動があったことは記憶に留めておかなければならない。

なお成大中の「李懋官哀辞」によれば、この人の生涯を述べたあと

に、次のような文章が続いている。

始め余の懋官を識るは、元子才に因る。日本の役に、子才と俱に道く。其の贈行の軸を閲するに、一詩序の光鋭、人を射るを得て、狎視す可からず。驚きて、「其れ誰の製か」と問えば、則乃ち懋官なり。歸るに及び、即ち之れに就く。懋官、年尚お少く、文弱甚だし。然れども著書已に累篋なり。未だ幾くならず老成し、多く輩行を折りて与に交わる。一時の名勝、其の文章を重んぜざる無くして、之れに従いて遊ぶを樂しむ。其の評批を得れば、金壁より珍とす。洪湛軒大容・朴燕巖趾源、最も其の得意の交なり。

(『青城集』十)

大中と後の北学派の接点もこうして玄川を経由したものであったことが知られる。「狎視」は軽々しく見ること。「名勝」は名士、人望のある人。たとえば洪大容・朴趾源がその代表だった。このとき大中が目にした「贈行の軸」は、長文の序を有する「書記遜庵元丈重拳の副使に随い日本に之くに贈り奉る」を指しているだろう(『青莊館全書』二)。

この「哀辞」にはまた、李德懋が北京に出かけたさいのことも記されている。

嘗て燕都に入りて、其の才俊に遇えば、則ち心を傾け、交を結ばざるは無し。欣びて舐めて覩るが若し。而して浙江潘庭、其の眉目を相して、之れを異人と謂う。後に復た詩を寄せて、許すに東溟第一流を以てす。然れども懋官は貴遊を喜ばず、程文を事とせず。端居教授し、之れに従いて材を成す者衆し。内行醇備、敦く人倫を尚び、一たび之れと交われば、終身渝らず。性又た清介にして、人に絶す。固より窮し、飢えを忍ぶ。人の堪えざる所、

之れに安んじて素の如し。其の青莊を以て、自ら号するは、亦た其の食を求めて喙を移さざるを取るなり。常に窮蹙に枯死するを以て期と為して、世に於いて遇を斬めざるなり。(同上)

「燕都」は北京。「潘庭筠」は既出。「相」は人相を見る。「異人」は優れた才能の持ち主。「東溟」は東海、ここでは朝鮮を指す。「程文」は科挙の考試の文例。そのようなことは気にもしないで、「端居」平生、塾を開いて子弟を教授していたところに、「檢書の命、忽ち天より隕」(同上) ちたのである。すなわち奎章閣の檢書官に首選されたことをいう。しかし本人はいよいよ「謹慎」して、「禁闕」に出入すること十数年、小心一日の如く、破靴弊帽、徒歩にて闕に趨く」というふうだった。「禁闕」は宮中。「闕」はその門。

余の罪を外閣に待つに、頼いに懋官は内省に在り。歩趣、常に之れと偕にす。『海東邑誌』を撰するに及び、子才も亦た命を承けて来たる。梨宮恩醜、乃ち懋官之れが主と為る。余も亦た比屋して居す。朝夕過從、殆ど形影の相隨うが若し。(同上)

「待罪」は官吏がその職にあることの謙称。「梨宮恩醜」は不詳。「比屋」は隣り合つて住むこと。それが相次いで没してしまい、大中は兩人の「哀辞」に筆を執る巡り合わせとなった。「玄川元公哀辞」は後に見ることにして、一つ補足しておきたいのは、李德懋の年譜に、

癸未 公二十三歳、七月、日は未詳、元玄川重拳・成青城大中の日本に入るを送り、詩以て之れを賸けす。(『青莊館全書』七十)

とある条に、割注で「玄川は即ち公の妹の舅なり」と記されているこ

とである。つまり李德懋の妹は、玄川の息有鎮の妻、つまり嫁に当たり、両者は姻戚だったことになる。

10

これまで玄川の公的な活動を中心に見てきたが、最後に玄川の日常を一瞥しておこう。成大中の「金先達(時和) 詩軸の後に書す」には、次のように記されている。

玄川元公子才、海槎より返り、南巷に卜居す。生徒を教授し、戸に屢常に満つ。余も亦た屢しば其の室に至る。草を藉き、泉に臨んで、田園の娛しみ足れり。然れども公猶お以て深からずと為し、尽室、砥平の勿川に入る。(中略)

梁氏の鳳凰台、溪山の絶勝、公の家を距つること、十里。良辰暇日、公輒ち牛に騎り、之れに就く。梁氏老少、隣を傾け欣び逐え、雞黍信宿、久しくして懈らず。扁舟、時に京洛に至り、過ぐる所の江墅、皆な行窩の若く之れを待つ。平生、未だ嘗て志を屈して容るるを求めず。故に常窩の李公敏輔曰く、「子才は利もて誘うこと能わず、威もて怵らすこと能わず」と。柯汀趙公鎮寛曰く、「勿老は古の遺直なり」と。其の賢宰相に重んぜらるること、此くの如し。

公は常に荀・陳の淑郷を慕いて、人を教ゆるに各おの其の才を以てす。金君時和は其の一なり。少くして嘗て文を以て解を発し、以て世に鳴るに足る。而るに旋いで乃ち筆を投じて、武科に挙げらる。蓋し其の世業なり。然して意は常に筆硯に在り。時有りてか詩を賦し、軸を聯ぬ。猶お是れ南郭の旧声なり。之れに対すれば、玄川を見るが如し。為に其の軸末に題して、以て存没の感を識る。(『青城集』八)

これを見ると、通信使行から帰国後、玄川は塾を開いていたが、まもなく「尽室」家を挙げて、「砥平の勿川」に隠退した。「良辰」は佳節。「雞黍」は鶏肉と黍飯でもてなすこと。「信宿」は再宿。「扁舟」は一艘の小舟。「江墅」は水辺の別荘。「行窩」は旅先で宿にする友人の別墅。「李敏輔」(一七一七〜九九)には、『豊墅集』(韓国文集叢刊、二三二・二三三)が伝わっている。趙鎮寛は裕叔。「遺直」は直を守る古風な人。「荀・陳」は荀淑と陳寔、「五百里内に賢人の聚まる有り」と、『蒙求』上に見える(「荀陳徳星」)。「存没」は生死。

次の作も玄川の人柄をよく伝えていよう。

和玄川失婢作 (玄川の婢を失う作に和す)

去歲樵僮連 去歲 樵僮連^に去
今歲汲婢去 今歲 汲婢去る
長者非少恩 長者 恩少なきに非ず
貧家自寡助 貧家 自ら助け寡し
翁則不自憂 翁は則ち自ら憂えず
反憐渠失処 反^つて憐む 渠が処を失うを
孰能推此心 孰れか能く此の心を推さんや
徧為寒士慮 徧^ねく寒士の慮を為すを

(『青城集』三)

去年は「樵僮」下男に逃げられ、今年は「汲婢」水くみの下女にも逃げられた玄川は、それを憂えるどころか、逆に彼らの居場所があるかどうかを案じるほどの人の良さ。これを大中は「寒士の慮」と捉え、翁自身が貧しいのに、我が身に先立って使用人の行く末を心配する心をだれが理解できるだろうかというのである。「徧」は遍と同義。このような人であったればこそ、任地を去るとき、人々が涙ながらに離任を惜しんだというエピソードが実感をもって思い合わされる。

こうして日常生活においては節を容易に曲げない善人として生涯を全うした玄川が、同時に北学派形成の後押しをし、その結果、洪大容はじめ燕行使に随って清朝の中国の地を踏み、その地の文人たちと交流して、文芸共和国と呼べるような人間関係を結んだことについては、既に多少は論じもし(付記を参照されたい)、また引き続き別稿を準備する予定である。

注

- (1) 思い返せば二〇〇五年五月十四日、成均館大学校で開かれた韓国18世紀学会で「李彦瑱の横顔」と題して発表したさい、韓信大の金京淑さんによる元玄川の発表もあったのだが、当時、私の関心がそこまで及んでいなかったために、残念ながらその内容は忘却の彼方にある。近年、鄭勲植氏の「元重拳と洪大容の使行録を通して見る18世紀の使行録の行方」(『朝鮮通信使研究』7、二〇〇八年)は、当該研究の新しい方向を示している。
- (2) 同書の印刷不鮮明箇所は、京都大学蔵写本のマイクロフィルムによって確認した。
- (3) 大潮については、拙稿「大潮元皓の古文辞学」(『江戸のバロック徂徠学の周辺』第七章、一九九一年、ペリかん社)を参照。
- (4) 鶴台のこの持論については、拙著『東アジアの文芸共和国』二十八頁以下(新典社新書、二〇〇九年)を参照。
- (5) 沢田瑞穂「盲詩人唐汝詢生卒考」(『閒花零拾—中国詩詞隨筆』研文出版、一九八六年)に拠る。
- (6) 『巾衍集』への接近には同僚の浅井邦昭氏の示教を得て、国内に所蔵される諸本に目を通したが、なかでも関西大学蔵内藤文庫本は最も詳細で、四冊すべてに「嘉林白氏之章」なる蔵書印が捺されている(水田紀久先生の御教示による)。もし「嘉林」が交附嘉林(ハノイ)ならば、このアンソ

ロジは北京―ソウル間を往来したばかりでなく、遠く越南までもたらされた可能性があり、内藤湖南の所蔵を経て現在、関西大学図書館に収まっているのも、東アジア文芸共和国の可能性を遠望する筆者の目から見ると（実証は今後に俟つもの）、感動的な書物の来歴であるように思われる。

広がりつつあるのは、ここ数年来の科学研究費補助金による共同研究「啓蒙と東アジア…相互性のプリズムを通じた18世紀学の構築」（課題番号 一八三二〇〇二五）の物心両面にわたる支援の賜であることを記して、関係各位に感謝の意を表する。

〔付記〕小論で使用した『乗槎録』はじめ、通信使関係の資料はすべて漢陽大学校教授鄭珉氏より提供された複写に拠る。私はこれまで、二〇〇三年の国際18世紀学会ロサンゼルス大会ラウンドテーブルにおける発表『Korean Envoys and Japanese Confucians』（のちに『金城学院大学論集』国文学編第46号、二〇〇三年に収録）に始まって、

「李彦瑱の横顔」（『金城学院大学論集』人文科学編第二巻第二号、二〇〇六年）、

「文人たちの宴『以德酔人、勝於以酒』——一七六三―四年の通信使行」
 『前近代における東アジア三国の文化交流と表象——朝鮮通信使と燕行使を中心に——』国際日本文化研究センター第29回国際研究集会予稿論文集、二〇〇六年）、

“A Republic of Letters in East Asia”（『金城学院大学論集』人文科学編第四巻第一号、二〇〇七年）、

「東アジア“文芸共和国”の可能性」（『金城日本語日本文化』第83号、二〇〇七年）、

「通信使・北学派・兼葭堂」（『朝鮮通信使研究』第四号、二〇〇七年）、

「成大中の肖像——正使書記から中隠へ——」（『金城学院大学論集』人文科学編第五巻第一号、二〇〇八年）、

『東アジアの文芸共和国——通信使・北学派・兼葭堂——』（新典社新書、二〇〇九年）

に至る一連の著述を通して、通信使と日本の文人との交流の一端を明らかにすべく努めてきたが、近年になって清朝の中国、ひいては越南にまで視野が